
Lord of The Ring RPG リプレイ
『サルマンの弟子』

作・ACRAP (全千葉演戯向上会)
リプレイ清書・海保 研

LOTR RPG 再開にあたり

こんなリプレイを書いておいて、今更カミングアウトする事でもないが、若い頃（高校生）には仲間達とテーブルトーク RPG をしていました。『全千葉演戯向上会』というチームを組織し、週一回 RPG をして、リプレイも書いて残していました。ちなみに、非常に創作意欲が横溢していましたが、恥ずかしいのでその時代の成果物は墓まで持って行こうと思っています。しかし、こんな楽しかった事も結局は青春時代の一滴の露。高校を卒業し、大学も卒業して社会人になると、すっかり忘れてしまいました。当然ですね。格好よく言うと、夢と引き換えにお金と社会的地位を得たようなもの。怪しいけど。

ところが、そんな忘れかけてた魂を取り戻す契機に遭遇しました。劇場版『指輪物語』（ロードオブザリング）3部作の公開です。個人的にはスターウォーズ級の映画文化への衝撃と思っています。この歴史的名作に触れる事によって、忘れかけてた RPG 熱が甦ってきました。

しかも、精神的にも、文化的にも、知性という面でも未熟なのに勢いに任せて作品とは呼びがたいクオリティのリプレイを量産していた（まあそれもそれで若さがあるからいいのだけど）高校時代とは違い、日々の仕事（プログラミングとか、マネージャーとか）で培った知力を動員することでハイクオリティの話が展開できるはずです。これはマスター、プレイヤー共の話であります。更に、IT化も進み、120分テープ3本になっていたプレイの記録も121MBの音声ファイルとなりました。再生も思いのまま、劣化もしません。

ということで、『大人の方でテーブルトーク RPG しよう』ってのが、この一連のリプレイのコンセプトになりました。もちろん舞台としてはロードオブザリングを設定し、優れた設定と魅力的な世界をベースとしながら原作の良さを決して落とす事無く、魅力的かつ構造的に優れたストーリー展開をします。正しくオマージュとしてロードオブザリングに挑戦してみたいと思います。

というわけで、試みとしてうまくいかはわからないものの、とりあえずやってみた。こんなリプレイを書いてみました、ということです。

目次

LOTR RPG 再開にあたり	2
キャラクター紹介	4
本編	5
第1章 旅立ち	5
第2章 バラールの謎	6
第3章 オークがもたらす予兆	9
第4章 ボンブリオンとの出会い	11
第5章 追うか、救うか	14
第6章 アリルの死と黒い剣の召喚	21
第7章 裏切り	24
第8章 畏と救出、そしてガラドリエル	25
次回予告	28

キャラクター紹介

- ◆ ファラシオン（シンダールエルフ、男、魔術師）

一応、このリプレイにおける主人公。のつもり。プレイヤーがマスター以上にロードオブザリングに詳しく、世界観を重視してプレイできるので結果的に主人公っぽくなった。エルフの魔術師という設定で師匠であるアマーギンから依頼を受けたところから冒険は始まる。卓抜した魔法の才を持つということにしてあるので、魔法の種類も数多く使える。
- ◆ フドーリン（ビョルン族、男、野伏）

野伏の割に戦闘で大活躍したビョルン族の男。ビョルン族は人間の一種であるが特殊な種族である。先祖は熊に変身するという特殊能力を持っていた。なので、ビョルン族には全て熊に変身する力が潜在的に隠れているということにする。ただし、この伏線をどのように生かすかは未だマスターは考えていない。
- ◆ ジョンドレド（ロヒリム、男、戦士）

名誉あるローハンの騎士ジョンドレド。しかし、「知性」の能力値が低かったということがあまりにもキャラクターの人格構成というかプレイヤーによるロールプレイに強すぎる影響を与えてしまった。騎士ということで充分活躍できるはずなのに舌足らずな田舎言葉と何かあったらお湯を沸かすことしかしないキャラクターになってしまった。それはそれで面白いとはいえ、世界観を壊す事にもなりかねないのが悩みの種
- ◆ ボンブリオン（ドルウィンリム、男、吟遊詩人）

プレイヤーが遅刻して登場したためにマスターが作成したものを与えたキャラクター。しかし、キャラクターの性格はプレイヤー本人に任せようとゆるゆるにしてみたら派手に裏目に出てよく喋るが捉え所のないキャラクターになってしまった。というかロールプレイしていなかった。唯一の見せ場は興奮して舌を噛んだところ位。キャラクターとしては次回登場するか怪しい・・・
- ◆ バラール（NPC、男、野伏）

キャラクターを正しい道に誘導するためと、戦力を補うために用意したというのが当初のコンセプトだったが、アマーギン共々、終盤で驚愕の事態に陥ることになる。とりあえず当初は考えていなかったが、ライバルキャラクターになりそう。
- ◆ アリル（NPC、男、忍び）

任務の発端となる盗人。なぜ盗んだのか、一体何者なのかはリプレイ本編にてと言いたいのだが結果的にあまり明かされていない。狼を連れているという設定で、以降こっちの狼の方が活躍しそうな予感。
- ◆ アマーギン（NPC、男、魔術師）

ファラシオンの師匠。バラール共々終盤で驚愕の事態になる。サルマンの弟子という設定なので言わずとも知れたもの。本家にならない、裏切りというものをやってみたかったというのがマスター的にはデカかったんです。

本編

第1章 旅立ち

マスター「じゃ、始めます。時代背景なんだけど、映画『ロードオブザリング』第1部のちょっと前つてところ。あと1ヶ月でビルボの誕生日¹だと思ってもらえばいい。では、ファラシオンは立派な魔術師を志して修行中ですが、師匠がいます。アイゼンガルドの魔術師なんですけど」

ファラシオン「なぬ？お師匠さん」

マスター「そうです。アイゼンガルドの魔術師アマーギン。彼が君の師匠です。でもってアマーギンの師匠がサルマン」

ファラシオン「ガーン！孫弟子。」

マスター「そういうことになります。ただし、言うまでもなくこの頃はまだサルマンはいい人だから」

ジョンドレド「じゃあ、俺の師匠がガンダルフ(笑)²。魔法技能0だけど」

マスター「でもって、(フドーリンに対して)君だが、君は野伏ですが、知り合いの野伏にバラールという人がいる。その人が君のところに来て『頼みがある。引き受ける気があるならアイゼンガルドまで来てくれないか』という事でアイゼンガルドに来ている」

フドーリン「のこのこと」

マスター「話をファラシオンに戻すよ。」

アマーギン「すまないけど、ちょっと頼まれて欲しい事がある」

ファラシオン「なんでしょう、お師匠様」

アマーギン「私の持っている魔法の道具が盗まれてしまったので、それを取り戻して欲しいんだ」

ファラシオン「して、魔法の道具とは？」

アマーギン「『ドゥ・デーのパイプ』というものなのだが無いと困るものなのだ。これをア Ril という男に盗まれてしまったんだ」

ファラシオン「名前までわかってるんですね(笑)³」

アマーギン「で、そのア Ril という男はどうやらアイゼンガルドから北の方に向かっているらしい。」

ファラシオン「わかりましたお師匠様。私に全てお任せください」

アマーギン「うむ。ア Ril はどうやら霧降り山脈の東側を北に向かうようだ。でそれを追って品物を取り戻してくれればいい」

ファラシオン「承知。」

マスター「で、アマーギンは道案内として、バラールという野伏がいるんだけど、バラールは一人の筋骨隆々の野伏(フドーリン指差して)を連れている」

ファラシオン「バラールと筋骨隆々？バラールって誰だっけ」

マスター「アマーギンが紹介してくれた野伏。目が見えないのか、常に眼は閉じられている」

ファラシオン「バラールとフドーリンの関係は？」

マスター「知り合い。野伏同士の知り合い。」

ファラシオン「用心棒というわけですね」

アマーギン「そういうことだ。必要があればア Ril を殺さなければならないかもしれない」

ファラシオン「必要がなくても殺しますので、ご安心下さい」

マスター「君はエルフでしょ」

¹ 指輪物語はビルボの誕生日が発端。このシナリオもそれに合わせることにした。

² いくらロードオブザリングへのオマージュを意識していてもそんな簡単にガンダルフなんか出さん！！しかし、この決意は後半なし崩し的に翻されることになる

³ 占ったの！水晶とかで！マジブルー。

ファラシオン「でも、中つ国に取り残されるような落ちこぼれだからな」
マスター「で、君はついでにジョンドレドを連れて行こうと。」
ジョンドレド「おおお、俺でいいのか(笑)」
ファラシオン「誰だお前は(笑)」
ジョンドレド「ていうか知力25なんだけど、言葉話せる？」
マスター「大丈夫。25はギリギリOK⁴。ダイスは24だったんだけどね」
ジョンドレド「たまにエルフ語とかで悪態ついていいから(笑)」
マスター「というわけで、何か聞きたい事はある？他に。」
ファラシオン「無理矢理仲間になりましたね(笑)。これからよろしく」
マスター「リプレイを書く時にはなんとかするから⁵」
ファラシオン「では、早速明日にでも出発しようではないか。このドウ・デーンのパイプ」
アマーギン「そうそう、これだけは話しておくが、どうやらア ril はエルフのようなんだ。」
ファラシオン「何いっー！？」
アマーギン「だから、北に向かったとすると目的地はもしかするとロリエンかもしれない」
ファラシオン「そんな、盗賊みたいな輩がロリエンに入れるわけがない。ていうかエルフの盗賊なんてとんでもない！⁶」
フドーリン「エルフの盗賊だったら入れてくれるかもしれないけど、北の蛮族の俺じゃあ無理だな⁷」
ファラシオン「そのときには切り捨てるから安心しろ」
フドーリン「できるもんならやってみろ」
マスター「大体ロリエンに行くとなると途上は15日程度。まあ、15日分の食料は持っていると思いますけど」
フドーリン「持ってるよ」
ファラシオン「冒険グッズの中に入っているよ。なんとって1金貨払ったんだから」
ジョンドレド「あ、ちょっと待って、こいつお金の計算大丈夫？」
マスター「ああ・・・微妙(笑)」
ファラシオン「俺はレンバス⁸持ってるからいいんだ」
マスター「それ許していいのかな。まあ、いいか。」
ジョンドレド「で、俺がこっそり食べてるんだけどね(笑)。口の横にくずが(笑)」
ファラシオン「嘘！？お前、俺のレンバス食ったな！！」
ジョンドレド「俺が食ったのは米だ(笑)」

第2章 バラールの謎

マスター「でアイゼンガルドを発って、霧降り山脈の南端を東に進んでいきます」
ファラシオン「じゃあ野伏を先頭に立てて」
フドーリン「任せんしゃーい」
ファラシオン「ところで、バラールは本当に眼が見えないのか」
バラール「昔・・・襲われて」
マスター「バラールは寡黙なキャラにしたので(笑)」
ジョンドレド「目が見えないと大変だなあ・・・トイレもできやしない」
バラール「大丈夫。心の眼がある」

⁴ ルー理的にペナルティの有無の境界が25なので、こういうことにした。

⁵ はい。何とかするの、失敗。

⁶ 念の為、指輪物語におけるエルフは半神であり、高潔で善の体現者とされている。ちなみに、指輪物語にはダークエルフはいません。出しません。まあ、敢えてつなげると墮落したエルフがオークの元になっているんだけど

⁷ さっきのジョンドレドの発言といい。一応プレイヤー皆さんロードオブザリングはちゃんと観ているのね。

⁸ エルフ謹製の保存食。第3部でゴラムとサムの仲たがいに原因となったあのダイエットシリアルスナックっぽい食べ物の事。と説明する必要はあるのだろうか。まあ固有名詞知らないかもしれないしね。

フドーリン「(私は) 何回か仕事しているんでしょ」
マスター「うん。している」
ファラシオン「いわゆる心の眼か!・・・博識だなあと思ってくれないと(笑)」
ジョンドレド「じゃあ、尊敬度⁹を1上げよう(笑)」
マスター「まあ、都合で馬は使えないということで」
ジョンドレド「馬扱えないからな、このキャラは」
マスター「大丈夫。騎乗技能は偉いことになっているよ。ロヒリムだからすさまじいんだよ」
ジョンドレド「あ、ホントだ。馬買わないと」
マスター「いや、持っていていいでしょ」
ジョンドレド「OK。じゃあ、方向音痴ということにしておこう(笑)」
ファラシオン「シャドウファックス¹⁰のまたいとこだから」

マスター「まずは霧降り山脈の南端を東に向かいます (さっき言ったけど)」
ファラシオン「これが霧降り山脈か・・・ここを上がっていけばイムラドリスに着くんだな・・・」
フドーリン「山脈を縦に越えるとは凄まじいな(笑)」
バラール「それは無理だ・・・霧降り山脈は越えられない」
ファラシオン「よくわからないんだわ」
ジョンドレド「そんなことないかもよ。親父はいつも言ってた『頑張れば何とかなる』(笑)」
ファラシオン「いい親父さんだな」

マスター「で、一日目の夜、野営します」
バラール「一つ提案がある・・・ファンゴルンは迂回しよう」
ファラシオン「このまま行くと突っ切ることになるが、迂回するということだな」
バラール「我々の間でもファンゴルンは危険だ¹¹、方向感覚が狂うとも言われていて、大幅なロスを受ける可能性がある」
ファラシオン「貴殿に任せよう。蛇の道は蛇と言うからな(笑)」
バラール「もう少し他に言い方があるだろう。」
ファラシオン「だって。餅は餅屋じゃ可愛いじゃん(笑)」

マスター「というわけで、二日目に突入した。何か(旅の途中で) したいことある？」
ファラシオン「狩り。なぜなら長弓をもてあましてるから(笑)」
マスター「・・・じゃあせっかくだからやってみるか。<知覚ロール>¹²をして」

知覚ロールの結果、3匹の鹿を見つけた。結果を厳密に当てはめると6匹だが面倒だから3匹にした。ちなみに、ジョンドレドはファンブル寸前だった

マスター「鹿までの距離は63メートルです。」
ファラシオン「じゃあ、距離を詰めよう」

今度は忍び足ロールを行い、結果30mまで接近することができた。30メートルは長弓が十分に届く範囲内である

フドーリン「鹿に襲い掛かるよ」
ファラシオン「待て待て! 弓で射ないと鹿逃げちゃうだろ!(笑)」

⁹ ちなみに、そんなパラメーターはありません。ジョンドレドのプレイヤーだけのルールと思われることは言うまでもない

¹⁰ 『飛陰』の方がわかりやすいかもしれない。ガンダルフの愛馬にして友。メアラスという特殊な種類の馬です

¹¹ なぜ危険かは第2部参照。それでもわからなければこのリプレイを読み進めていけばよい。

¹² 名前の通り、何かに気づいたり、発見するかを判定するためのロール。よく使う。

ジョンドレド「俺後ろから撃っちゃおうよ」
ファラシオン「やめろって。肉取ってきてやるから(笑)」
フドーリン「料理の準備をしていてくれ」
ジョンドレド「わかった。お湯を沸かしてよう¹³」

ファラシオンのみが弓を撃つ。完全な奇襲になったので。鹿に 13 点のダメージを与え、痛打¹⁴として前腕に軽傷を与えた。1 ラウンド麻痺となる。

ファラシオン「麻痺？よし、フドーリン、行け！」
フドーリン「よっしゃ！」
マスター「鹿は驚き、1 匹は逃げていったがもう 1 匹は牡鹿だったので襲ってくる」
ファラシオン「よし。フドーリン。頼んだ」
フドーリン「おう。任せろ。」

第 1 ラウンド。さすが牡鹿は早く、目の前のフドーリンに攻撃する。フドーリンは鎖帷子を装備していたのでかすり傷で 5 点のダメージ

マスター「じゃあ、そっちの番。フドーリンは？」
ファラシオン「麻痺してる鹿（を撃つため）に弓をつがえるよ」
マスター「ジョンドレドは？」
ジョンドレド「お湯を沸かしてる(笑)」

まともな攻撃をするのはフドーリンだけ。牡鹿に向かって斧を振り下ろす。21 点の大ダメージを与えつつ、致命的な痛打を与える

マスター「側頭部に強い一撃を与え、即死。」
ファラシオン「この蛮人め。」
フドーリン「首を叩き切った。」

残った雌鹿にファラシオンが矢を放つが、外れた。

ファラシオン「はあああずれたああああ」
マスター「というわけで、戦闘終了。残ったのはフドーリンが仕留めた牡鹿だけ。肉を回収することはできるだけ、君たちは肉をどうにかする技能なんか持っていない¹⁵から・・・」
フドーリン「いや、全部食うんだよ」
ジョンドレド「俺、生のままお湯に入れて食っちゃおう」

というわけで、鹿肉をたいらげた。

ジョンドレド「もう、既に当初の目的を忘れてるから」
マスター「というわけで、君らは鹿を食いながらこの場に一泊することになる」

マスター「各自、知覚のロールをしてください」

ジョンドレドが無限ロール発生¹⁶の超成功。

¹³ この「お湯を沸かす」発言が何故か以後続く事に。

¹⁴ 独特のルールとして通常のダメージ（いわゆる HP 式）の他に「痛打」と呼ばれるダメージを判定する。これは d100 によって「太腿に重傷」などの追加ダメージを付加することができる。リアリティのある戦いになるから好きだが、めんどい。

¹⁵ まあ、これはあることにしてもよかったかもしれない。野外活動のエキスパートである野伏も二人いるんだし

¹⁶ このルール独特のもので、d100 を振ったとき、96 以上だともう一回 d100 を振って加えられる。もちろん 2 度目も 96 以上であれば更に加えられる。これにより d100 の結果は理論上は無限。ただし逆に 04 以下であればもう 1 回振ってマイナスをしていくことになる。成功の価値をあげる素晴らしいルールだと思っているんだけど、どうだろう？

マスター「じゃあ、ジョンドレドだけ。3日目の明け方にウトウトしていると、バラールが既に起きていて、何かを待っているようだ」

ジョンドレド「・・・」

マスター「しばらく様子を見てみると、遠くから鳥が飛んできてバラールの耳元に囁く」
？「ア ril は現在ファンゴルンにいる。確実に仕留めるのだ」

マスター「と言って、鳥はまた去っていく」

ジョンドレド「なんのことかわからない(笑)」

マスター「その通り」

ジョンドレド「おおお・・・小鳥さんが喋ってるよ・・・、話してたよあの小鳥さん。」

フドーリン「知的レベル低すぎだろ(笑)。お前はオークか！」

ファラシオン「どうした、ジョンドレド殿」

ジョンドレド「いやあ。明け方にさ、鳥が飛んでて、耳元で囁くんだよ」

ファラシオン「誰の耳元に？」

ジョンドレド「忘れちった。何かが見つかったとか言ってたけど、俺には関係ないさ」

ファラシオン「鳥が飛んでいた・・・うむ、如何ともし難いな」

フドーリン「俺も如何ともし難いな」

第3章 オークがもたらす予兆

マスター「3日目は何事も無く過ぎ、4日目。エント川のほとりで昼食を取る」

ファラシオン「ア ril はこの河を渡ったのだろうか・・・」

バラール「どうやら、ア ril はファンゴルンを抜けて行くようだ」

ファラシオン「何？俺らが避けたファンゴルンを！？」

バラール「うまくいけば、追って捕まえることが可能だろう。」

ファラシオン「それは俺らがファンゴルンに入るということか」

バラール「いや、その必要は無い。ファンゴルンの出口で待ち構えよう」

ファラシオン「わかった。その作戦でいこう」

マスター「というわけで、ファンゴルンの東を北上する。夕方になると・・・<知覚ロール>してください」

フドーリンが無限ロール成功したので、オークを発見した。数は3匹。

フドーリン「オーク3匹があそこにおる」

バラール「オーク3匹か。避けるのも難しいな」

フドーリン「どんなオーク？強そう？」

マスター「いや、弱そう」

フドーリン「俺に比べれば大した事はない。ガキみたいなもんだ」

バラール「下手にやりすぎすのも大変だ。こっちから先にしかけて仕留めよう」

フドーリン「ファラシオンにも言うよ」

ファラシオン「オークだと？けがわらしい¹⁷生き物だ！」

フドーリン「俺も大嫌いだ」

第1ラウンド。距離は28メートルで完全奇襲で攻撃をしようとする。オークはそれぞれ剣、ダガー、弓で武装している。ファラシオンは弓を持っているオークに対し、矢を放つが、外してしまう。ジョンドレドは・・・

ジョンドレド「オオオオク！って言いながら突っ込むよ」

¹⁷ ごめん。こう言った。

ジョンドレドが馬で突っ込むが、ダイスの目がふるわず。大したダメージを与えられなかった。

フドーリン「俺もオオオオク！って言いながら突っ込むよ(笑)」

マスター「馬じゃないから届かない(笑)」

フドーリン「バカ二人」

バラールも攻撃したが、外れてしまう。突然の奇襲に驚いたオークは剣を持つオークを残して逃亡する。残りは1匹

第2ラウンド。ジョンドレドが再び攻撃をしかける。d100で100の目を出して無限ロール。残る1匹のオークへ大ダメージを与える。

ジョンドレド「お湯を沸かせーっ！(笑)」

ファラシオン「えーっ！」

フドーリン「食うのーっ？¹⁸」

ファラシオン「ロヒリムのイメージが・・・」

ファラシオン「持ち物を探ってみよう」

マスター「持ち物を探ると、何かを書いた紙が見つかる」

ファラシオン「ん？何だ！？これは」

マスター「が、当然の事ながらこれオーク語で書いてある。読めない」

ジョンドレド「な、なんて書いてあるの？読んでくれよ」

フドーリン「ンゴゴゴガ・グ・ゴゴ¹⁹って書いてある(笑)読めやしない」

マスター「あと地図も書かれている。地図が指し示している場所はアイゼンガルドである」

フドーリン「これはオークがアイゼンガルドを襲うに違いない(勝手に解釈)」

マスター「ところがオーク語がわからないから。」

フドーリン「オークを起こしても聞けないだろうなあ」

マスター「オークを起こすなら起こしてもいいよ。まあ応急手当もしていないからそのうち死ぬだろうけど。」

フドーリン「オークを起こそう」

マスター「荒い息を吐きながら睨みつけている」

フドーリン「喋れ！バシッ！」

瀕死のオーク「✓▲●▼●①↑▲？①⊖✓■▼■▼×▲♣-」

フドーリン「首のあたりに斧を突きつける」

瀕死のオーク「⊖✓！■▲♣*②×▲♣*▲×▲？✓●▼①♥■*③×■²¹」

ジョンドレド「お前、煮込みと焼くのどっちがいい。」

フドーリン「黙ってお湯を沸かしていればわかるでしょ(笑)」

瀕死の敵に対する残酷な描写がしばらく続くので自粛させていただきます。

フドーリン「縄を解いて、逃がすよ」

ファラシオン「よし、後をつけよう」

追跡に成功すると、オークは先に逃げた二人のオークに合流した。

ファラシオン「隠れて様子を見るよ」

¹⁸ なかなか活字じゃ伝えられないが、この台詞。うすた京介先生の漫画をイメージしていただけるとニュアンスがお分かりになります。

¹⁹ 言うまでもなくオークのつもり

²⁰ オーク語のつもり。訳すと na,naniwosiyagaru?

²¹ yametekure,korosanaidekure

ジョンドレド「あの、馬乗ってる(笑)」
マスター「ごめん、見つかった」
フドーリン「しょうがねえなあ」

ジョンドレド「オオオオク！って言いながら襲い掛かるよ(笑)」
ジョンドレド「俺もオオオオク！って言いながら(略)」

最初のラウンドは互いのグループは陣形を整えて終了

第2ラウンドになり戦闘が始まる。ダガーを持っているオークがジョンドレドに攻撃をするが、外れ。いや、1点のダメージ。続いてジョンドレドだが、これも外してしまう。続いて弓を持っているオークもジョンドレドに攻撃するが、外れ。外れの連発

ファラシオン「弓を持っている奴に撃つよ」

これも外れてしまう。少しも展開しないが、最後のフドーリンがぶちかます

マスター「痛打。側頭部に当たり、即死。首を吹っ飛ばした！²²」

残った最後のオークは逃げなかった。これもジョンドレドが外したあと、フドーリンが致命的な痛打を与える

マスター「片足への打撃で骨を折る。死亡。」

フドーリン「二人、殺してしまった」

ファラシオン「こ、怖いかも」

マスター「最後のオークも出血多量で死亡」

ファラシオン「皆殺しだ。あーあ、皆殺しにしちゃった。これだから野蛮人は。」

フドーリン「そんな事言たって、斧振ったら首飛ぶんだからしょうがないじゃないか！(笑)」

ファラシオン「逆ギレだよ、この人(笑)」

結局全員殺してしまったのでしょうがなく旅を再開する

第4章 ボンブリオンとの出会い

マスター「6日目は何事もなく過ぎ、7日目でファンゴルンの北に差し掛かったところ、ジプシーの団に遭遇する」

ジョンドレド「お湯を沸かさなくていいよな？」

フドーリン「食う気？」

ファラシオン「人間だから(笑)」

ジプシー「やあ、ごきげんよう。旅人さん」

フドーリン「何人くらい？」

マスター「20人くらいの規模です」

ファラシオン「あなた方は芸人なのかな？」

ジプシー「そうですよ」

ジョンドレド「あれやってくれよ、ビートたけしのものまね(笑)²³」

マスター「残念ながらそれはできない。彼らにできるのは剣舞とかジャグリング。」

ジョンドレド「じゃあ、俺が頭の上にリンゴの乗っけておくから」

フドーリン「見事射抜いてくれ、この頭(笑)」

<CM>

²² ふと思ったけど、この痛打のロールが高いということが、本当の打撃力かもしれない

²³ そんなもんはない！というかマスターができない！古畑任三郎ならできるのに・・・

ボンポリオンの中身が登場した。ボンポリオンのキャラクターはあらかじめ作ってあったので、その詳細とここまでのストーリーを説明するため休憩。²⁴

マスター「というわけで、ボンポリオンに説明するけど、君はジプシーの一員で笛を吹いて生業を立てている。職業は吟遊詩人ね」

ボンブリオン「吟遊詩人で笛かよ！」

マスター「しまった！²⁵」

ファラシオン「笛の音色が歌ってんだよ(笑)」

マスター「で、君がジプシーの一団として旅をしていると、彼らに遭遇したというわけ。アドリブで仲間になってくれ²⁶」

ファラシオン「君たちは芸をするんだよ」

ロールの結果、そこそこウケたということになる

ファラシオン「こんなトコで油売っていいのかな(笑)」

ジョンドレド「俺の馬ダンスを披露してあげるよ。馬で飛んだり跳ねたりする(笑)」

こちらもロールをしたが、結果は大したことなかった

ジョンドレド「あれえ〜？今日は調子が悪いなあ」

ファラシオン「じゃあ、『俺のこの芸を見てみろ！』って言って『透明』を使う。ターゲットはこいつ(ボンブリオン)の服！(笑)」

ところが、こんな時に限って無限ロールに成功してしまう。合計、ダイスだけで316。

ファラシオン「全身全霊を懸けてボンブリオンの服を透明にした！(笑)」

ボンブリオン「なんじゃこりゃーっ！って物陰に隠れる」

ファラシオン「止めて」

ジョンドレド「わかった(笑)」

止めるのは失敗してしまった。

ボンブリオン「物陰に隠れてなんか服を着ようとするんだけど、ゴワゴワする(笑)」

ファラシオン「じゃあ、俺らはすっかり打ち解けて宴会している」

気をよくしたジプシーは占い師がタダで占ってくれる事になった。

ジョンドレド「じゃあ、お、俺の馬を占ってくれよ」

ファラシオン「馬かい！」

ジプシー「ああ、見事な馬ですね²⁷」

ファラシオン「みたままじゃないか！(笑)」

マスター「『この馬の命は近い内に失われるだろう』といわれた」

ジョンドレド「！・・・すごい落ち込んでるから。ああ、もうだめだ・・・」

マスター「でもって、バラールはアシルの場所を占ってもらっている。どうやら、ファンゴルンのかなり北に既に来ているらしい。ファンゴルンを越えそうだ」

フドーリン「こんな所で油を売っているどころじゃないじゃん。」

ファラシオン「じゃあ、我々がどうしたらいいのか、占ってもらおうじゃないか。」

マスター「しばらくすると、ジプシーの占い師は『...むむっ、これは？』」

²⁴ マスターが一服したかった

²⁵ しまったと思った。吟遊詩人は歌わなきゃいけないという暗黙の了解があったのに。まあいいか

²⁶ プレイヤーのレベルが高い、だろうと思ったのでここはアドリブで仲間になってもらう

²⁷ ドジっただけです。見て分かる事しか言えない占い師であった

ジョンドレド「なんということじゃ、馬が死んじゃったよー(笑)²⁸」
マスター「占い師は恐れおののいている」
ファラシオン「どうしたんだばーさん？」
マスター「『お主達が、お主らが・・・恐ろしい怪物と戦っておるのじゃ』」
ファラシオン「ボンブリアン？(笑)」
フドーリン「多分熊だと思うよ」
マスター「『空飛ぶ獣に乗った・・・黒の乗り手と・・・戦っておるのじゃ』」
ファラシオン「黒い乗り手・・・」
フドーリン「黒い乗り手ということは、俺も黒い服を着ればなれるのか？(笑)」
ファラシオン「そうすればなれる。馬は死ぬけどな(笑)馬の肖像画でも書いてて」
マスター「占い師はそれ以上は何も語ろうとしない」
ジョンドレド「このジプシーのばあさん、使えそうだから持っていこうぜ(笑)」
ファラシオン「ボンブリアンよりも使えそうだな。ところで、ボンブリアンどこにいるの？」
ジョンドレド「おいボンブリアン。」
ボンブリオン「馴れ馴れしいなお前！」
ジョンドレド「俺の馬代わりになってくれよ(笑)²⁹」
ファラシオン「どうだ、これが魔法の力と言うものだ。すごいだろう。」
ボンブリオン「はた迷惑な力だな。」
ファラシオン「・・・どうだ、この魔道の技を極めて見る気はないか？その気があれば教えるぞ」
ジョンドレド「教えてくれ！(笑)」
ファラシオン「お前は馬が強すぎるから駄目。教わりたくないのか？透明にし放題だぞ？弟子になるんならな」
ボンブリオン「マジかー！？透明にし放題！？なる！」
ファラシオン「弟子は何でも行く事きくんだぞ。」
ボンブリオン「な、何でも？」
ファラシオン「...まあ、それは後々考える(笑)」

少々強引だったが、ボンブリアンは仲間になった

マスター「その夜はジプシーに歓待されて、翌日。」
ファラシオン「朝起きて、二日酔いの頭を抱えながら・・・今何時だ？8時か」
マスター「1時だよ。」
ファラシオン「寝過ごした—————！パンをくわえながら飛び出すよ！」
フドーリン「お兄ちゃん、カバンカバン(笑)」

マスター「というわけで、ファンゴルンの出口に到着した」
バラール「ここで、探索しよう」
ファラシオン「了解。バラールの言うとおりにします」

キャラクターはロールを行うが、何も成果をあげる事が出来なかった

ファラシオン「なにい！？そんなはずはない！探せ！探すんだ！！」

更に半日をかけて搜索し、ボンブリアンが旅の跡を見つけた

ボンブリオン「師匠、こんなところに足跡が！」
ファラシオン「ほう、どんな足跡だ？」
マスター「バラールが調べて『間違いはない、アリの足跡だ』エルフの足跡と、あとイヌ科と思われる

²⁸ ごめん。この占いはずれ。

²⁹ ジョンドレドはロヒリム、ロヒリムはローハンの民族、騎士の国です。まあ、どうでもいいけど

足跡。」

ジョンドレド「追われているのかな？」

マスター「いや、時期は一緒」

ファラシオン「この足跡を追跡してみよう」

またしても、ボンブリオンが大成功した。

マスター「どうやら、一日前にここを通ったらしい」

ファラシオン「よし、スピードアップして追いかけてよう」

第5章 追うか、救うか

追跡を開始する一行。一日経過したが距離はつまらない

マスター「その夜、9日目なんだがファンゴルンを北上するが、村が見つかる」

ファラシオン「とりあえず情報収集のために寄ってこよう」

マスター「君たちが村に入ると、村人達がさめざめと泣いている」

ファラシオン「泣き虫村か？手近な美女に声をかけてみよう」

マスター「美女はいなかった」

ファラシオン「ガビーン！」

ジョンドレド「きっと夕飯のシチューを焦がしちゃったんだよ」

マスター「村人が言うには『実は、村でも評判の美人が盗賊にさらわれてしまい、身代金を要求しているのですが、とてもではないが払える額ではなく、こうして悲しんでおるのです』」

ファラシオン「して、美女は何人？(笑)」

マスター「ひ、一人ですが・・・」

ジョンドレド「じゃあ、俺が助け出すから、その美女をお嫁さんとしてくれよ。」

フドーリン「む！」

ファラシオン「キラリーン！皆目の色が変わっているから(笑)」

キャラクター達は交渉と影響力を確かめるためのロールを行う。

マスター「それは本人に交渉してください。」

ジョンドレド「オッケ、オッケ。それでいい。」

ということで、救出に向かう気満々になっている一行ではあるが

マスター「バラールとしてはここで油を売るより、先に進みたいようだけど・・・」

ジョンドレド「じゃあ、俺残って助けてくるよ(笑)」

ファラシオン「そうだな、迷い所だな・・・盗賊のアジトは？」

マスター「『ここから半日ほど行った丘の上の小屋です』」

フドーリン「さらわれたのはいつ？」

マスター「『2日くらい前です。奴らは身代金を・・・』」

ボンブリオン「盗賊はいっぱいいるのかなあ？」

マスター「『5人ほどです。』」

ファラシオン「こっちと同じか。」

ボンブリオン「大丈夫ですよ。師匠の裸んぼうの魔法でみんなを丸裸にしまえば。」

ファラシオン「そういえば、この辺りをエルフが通らなかったか？」

マスター「『そうですね。ひどく傷ついたみたいで、びっこを引きながら狼を連れたエルフが通りました。』」

ファラシオン「よし、ここは敢えて兵力分散の愚を犯そうか！(笑)そして、各個撃破される！」

フドーリン「バラールに先に行ってもらえば？」

マスター「ただ、君たちはバラールの護衛だから、バラールに何かあったら報酬は払えないと言っているよ」

ファラシオン「そうか。いや、こんな所で困っている人を見捨てるわけにはいかない！」

ボンブリオン「美女だから」

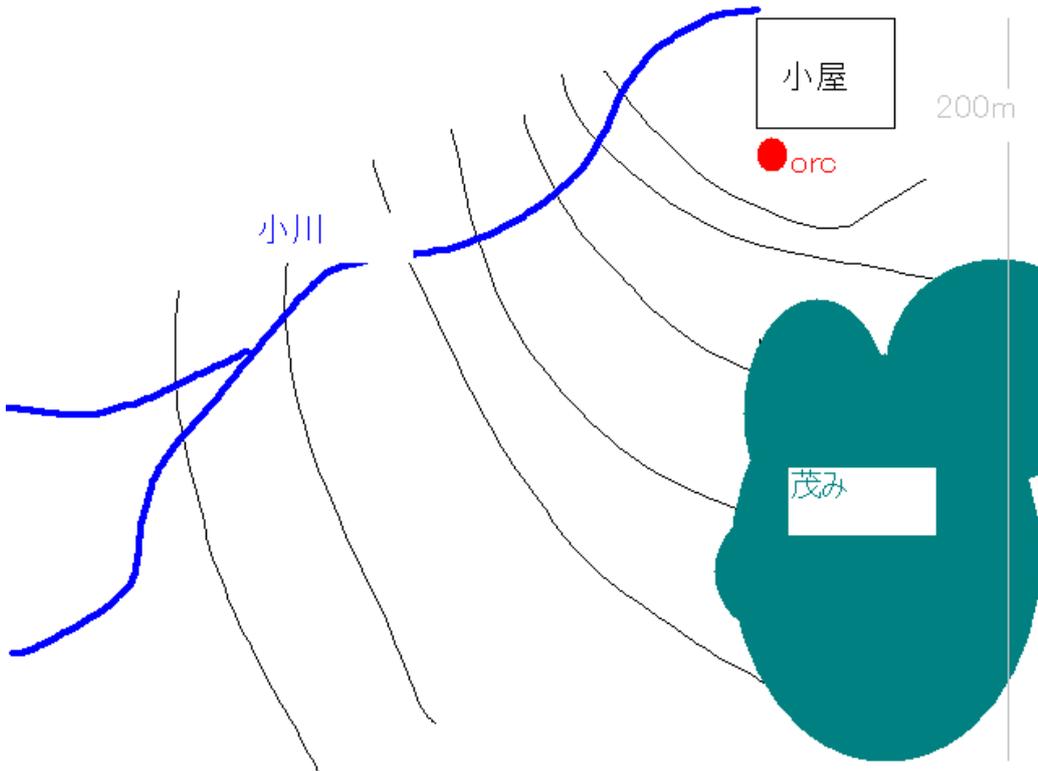
ファラシオン「美女だから。」

ボンブリオン「これさえなければ・・・」

フドーリン「さっさと殺して、さっさと行けばいいじゃん。」

マスター「じゃあ、バラールは渋々ついて来る。」

というわけで、村娘の救出に向かうことになった。



マスター「というわけで、地図。」

ファラシオン「地図を出したって事は準備をしてあったってことだから。寄り道してよかったんだ(笑)間違いはない」

ボンブリオン「この線は？」

マスター「等高線のつもり。丘の上だからね」

フドーリン「orc? オーク？」

マスター「オークやめた。オークだったら身代金求めるわけないし。」

ファラシオン「これは、orc だった盗賊ね。でもって昔炭焼き小屋だった男ね。(笑)³⁰」

ボンブリオン「小川途中で切れてんのは？」

マスター「間違い間違い。」

ファラシオン「これはね、『小川』というテキストを貼り付けたから、ここ切れちゃったの(笑)」

マスター「むかつく～」

フドーリン「『茂み』見ればわかるじゃん(笑)」

ボンブリオン「ここだけ茂みがないわけじゃないのか。」

ひとしきり、一分で描いた図の説明をすることに。

³⁰ うちらだけに通じる秘密のネタ。炭焼き男。

ファラシオン「じゃあ、南の茂みに隠れて接近するよ。馬は置いてけよ。」
ジョンドレド「えっ？そうか・・・俺馬がないと何もできねんだけど。」

ともかく、隠れて接近する一行。距離は200メートル程度のところ。ところが、ファラシオンがファンブルをしてしまう。しかし、技能が高いので大した被害はなかった。

マスター「じゃあ、途中で転んで3メートル前進したとかにしておいて」

他の面々も少しずつ前進する。ちなみに、フドーリンが一番前。しかし、しばらく進んだところでいきなりファラシオンが思いつく。

ファラシオン「あ、そうか。見張りが一人だろ！じゃあ魔法をかけるよ」

ファラシオンが前進し、発見もされなかったため『魂使い一眠り³¹』の呪文を唱える。結果は魔法を唱えるのに成功し、小屋の前の見張りの盗賊は寝た。

マスター「中にいる連中に気づかれる恐れがあるけど」

フドーリン「みんなカードゲームに夢中なんだって!？」

中の様子に気づくために知覚のロールを行う。すると、ジョンドレドが

マスター「『おい、なんか物音がしなかったか?』」

ジョンドレド「ニャー!(笑)」

マスター「猫の声?そんなロールねえよ・・・」

しかし、隠れのロールを行い、これが無限ロールで成功してしまう。

マスター「『なんだ、猫か』(笑)」

ボンブリオン「キタキター! 20年ぶりにキター!」

ファラシオン「うまく、忍び寄れる?」

マスター「もちろん。見張りのやつには忍び寄れるよ。」

フドーリン「じゃあ、すまきにして、縛って小川に流すよ(笑)。」

ファラシオン「そいつを縛って、一旦下がるよ。」

ボンブリオン「中の様子がどうなっているか、そいつから聞き出そうぜ!」

フドーリン「お湯の準備を!」

ジョンドレド「オッケ!(笑)」

縛った盗賊に対し、以下茂みにて・・・

マスター「こいつ起こすの?」

ファラシオン「もちろん、起こすときには、矢をこの目のところに当てて起こすよ」

マスター「お前ら捕虜には元気だよな・・・起こしたよ。」

ファラシオン「騒ぐな!少しでも大声を上げたらぶっ刺さるからな、これが。外してやれ」

盗賊「誰だお前は!」

ファラシオン「・・・ボンブリオンとその一味だ!(笑)」

盗賊「さては、お前ら村娘を取り戻しにきやがったな!」

ジョンドレド「もちろん」

ファラシオン「もう、あんなこととか、こんなこととか、したのか!?(笑)」

盗賊「まだ何もしてねえよ³²」

フドーリン「お前と仲間は、仲がいいのか?」

盗賊「仲がいいも何も、最近会ったばかりだよ」

³¹ このルールでは、魔法は系統にわかれている。これは「魂使い」系統の「眠り」という呪文

³² 後から気がついたんだが、さらってから2日経ってるんだし、何もしていないはずがないか。

ファラシオン「ちなみに、身代金はいくらせしめるつもりだったの？」

盗賊「30gp だ」

ファラシオン「払えるじゃん、俺ら！(笑)」

フドーリン「払ってやりゃあよかったじゃん！」

ファラシオン「30gp を山分けするつもりだったのか？」

盗賊「そうだ」

ファラシオン「・・・山分けより、30gp を独り占めしたくはないか？ちょっと俺たちに手を貸してくれれば³³」

ここで、交渉のためのロールを行う。結果はおしい所までいった

マスター「かなり心が揺らいでいる」

フドーリン「ここで人攫いして犯罪者になっても追われる身だぞ。助けた方が身のためだ。」

盗賊「じゃあ、どうすればいいんだよ？」

ファラシオン「我々を手伝ってあの娘を助けるのだ」

盗賊「分け前はどうなるんだ？独占できるのだ？」

ファラシオン「独占できるのだ？」

盗賊「(目の色を変えて) わかった、何をすればいい？」

ファラシオン「何をさせようか？(笑)」

買取した後のことは何も考えていなかったが、この盗賊に何人か小屋の外に仲間を誘きださせることにしようということになった。囷はジョンドレドの馬（リシュリユー）。ジョンドレドがロールに成功したため、この囷という難しい役割もこなせてしまった。

ファラシオン「俺らは小屋の後ろに回りこみ、捕らえた盗賊に仲間を茂みに誘きださせて貰おう。」

さて、この盗賊のロールの結果、当初の計画通り、小屋の中から盗賊が 3 人連れだされた。残るは小屋の中に二人。

フドーリン「よし、中は二人だな。挟み撃ちにしよう。窓はある？」

マスター「あるけど、体の大きいキャラクターは進入は無理だよ」

ファラシオン「じゃあ、ガラスを俺が割るから、割って気を取られたところに 3 人が進入して。」

マスター「オッケ」

ファラシオン「あと、ガラスを割った後は俺は 20 メートルくらい離れて、弓矢で窓に向けて狙いをつけているからね。ちょっと出たら、もうビュン！って。もし、皆が出たら刺さるからゴメンね(笑)」

というわけで、ファラシオンがガラスを割るのとほぼ同じく、戦闘開始。まずはフドーリン、ポンブリオン、ジョンドレドの先制の不意打ちだが、揃いも揃ってダイスの目がふるわない。

マスター「なんか、バタバタしてると気づかれた」

フドーリン「狭いところに 3 人いっぺんに詰め込んだんだ(笑)」

ファラシオン「コントになってる・・・俺が窓割った意味ないやん。」

マスター「ということで、不意打ちのイニシアチブはなしで。もう、ロールが悪い(笑)」

普通に戦闘が開始される。順番を決めるサイコロの結果、盗賊が剣でフドーリンに攻撃をする。12 点という結構高いダメージを与え、痛打として片膝を砕き、3 ラウンド麻痺。

ファラシオン「俺は不意打ちが失敗したことを感づいて、窓際に移るよ」

マスター「おっけ。もう一人の盗賊、ハルバードで攻撃」

ファラシオン「ハルバード？部屋の中ですか？」

³³ 仲間割れを提案するのが、エルフか？

マスター「…ハルバードで攻撃。ムキになってみた。」

しかし、この盗賊の攻撃ははずれた。続いてボンブリオンだが、魔法の杖を持っているが、魔法を使う以上に何もできない。「音使い」の呪文を使えるが、意味はないので、杖で殴ることにした。

ボンブリオン「弱そうな奴を殴ろう・・・01」

マスター「フアンブルだな。もう1回ふって。」

ボンブリオン「・・・84」

マスター「高いと駄目なんだよ！・・・『興奮して舌を噛み切り、飲み込んでしまう！』」

マスター、プレイヤー共に大爆笑ですので、しばらくお待ちください。

フドーリン「それはねーだろ、ありえねーよ(笑)」

ボンブリオン「あうわ、アんわー！」

ファラシオン「せめて舌を噛み切ったくらいにしようぜ。」

マスター「ジョンドレド攻撃してくれ、この場を何とかしてくれよ〜！」

気を取り直して、ジョンドレドはハルバードを持つ盗賊に攻撃したが、外してしまった。

続いて次のラウンド。片膝を砕かれたフドーリンと舌を噛み切ったボンブリオン以外のジョンドレドとファラシオンがイニシアチブを判定する。しかし、盗賊の先制

マスター「盗賊は攻撃するんだけど、ジョンドレドに行くよ。残りの二人が戦闘できるように見えないから」

ファラシオン「待って待って、バラール何してんだよ！？この戦いだけはやってくれ。危ないから(笑)」

盗賊のジョンドレドへの攻撃ははずれ、参戦したバラールは盗賊に軽傷を与える。続いて窓の外にいるファラシオン。

ファラシオン「『光弾』の準備をする」

ハルバードを持った盗賊もジョンドレドに攻撃するが、かすり傷。ジョンドレドの反撃もはずしてしまう。

マスター「次のラウンド。ボンブリオンは麻痺が取れたから行動していいけど」

ボンブリオン「もう、やる気がなくなったので、アウ、アウアウアウアウ。師匠、助けてくださ〜い」

ファラシオン「ボ、ボンブリオン。どうやってそんな攻撃を受けたんだ！？」

ボンブリオン「窓から出ようかな(笑)」

うーん。勝てると思っていたんだが。しかし、以降盗賊の攻撃は振るわない。一方で準備が完了したファラシオンが『光弾』の呪文を放つ。弱いほうの盗賊に12点のダメージを与えた上、片膝の腱が切れ、累積したダメージによって、気絶してしまう。

ボンブリオン「最初からファラシオンに任せておけば」

ファラシオン「魔法の強さがよくわからなかったんだ、偉そうに言っておきながら。」

しかし、ハルバードを持った盗賊も攻撃をしくじってしまう。ハルバードを壁にぶつけて折り、駄目にしてしまう。そこにジョンドレドが攻撃をするが、外してしまう。この人攻撃ははずしまくり

ジョンドレド「馬がないと何もできないよ〜」

続いてバラールは痛打に結びつく攻撃を与える。麻痺はないものの激しい出血により、続くターンもダメージを与えることになる

次のラウンドは、盗賊は短剣に持ち替え、ファラシオンは呪文の準備を行う。ここでジョンドレドが始めてマトモに命中し、痛打へ

マスター「『前腕に軽傷、1ラウンド麻痺！』」

麻痺している盗賊へバラールが攻撃をするがこれも外してしまう。ちなみに、ボンブリオンは舌を噛み切って戦意を喪失したため、ドアを開けて出て行った・・・

フドーリン「麻痺している奴相手に。目が見えないからしょうがないか。」

このラウンドが最後になり、バラールが盗賊の手を斬りおとして、勝負を決める。

フドーリン「この、痛打ってとんでもなく痛いね。」

ファラシオン「このゲーム痛打のゲームだから。呪文はキャンセルするよ。」

マスター「もう盗賊共は出血多量で死にそう」

ボンブリオン「俺も死にそうなんだけど」

フドーリン「俺も(笑)。」

というわけで、苦しかったが、盗賊との戦闘に勝利した。

ボンブリオン「外に出てった連中は戻ってこないのかな」

マスター「・・・(ロールをする)・・・むしろ、馬を追って行ったらしいよ(笑)」

ジョンドレド「じゃあ、俺馬を呼びに行く」

ボンブリオン「場所わかるのか？」

ファラシオン「俺はこの間村娘に。」

マスター「・・・娘はすごく怯えているよ(笑)。血が流れすぎた。明らかに」

ボンブリオン「このパターンだと怯えているか、笑っているかどっちかだよな。」

マスター「仕方ないから。バラールがボンブリオンとフドーリンは手当てをする。」

ファラシオン「じゃあ、あいつらは戻ってこないのね？一応寝返りも計算しておいたんだけどね、後ろから襲い掛かれって。」

マスター「とか言ったら、残りの一人の盗賊が戻ってきた。」

ファラシオン「何お前一人で帰ってきてんだよ！誰が馬を捨てていいって言ったんだよ。50gpするんだぞあの馬」

盗賊「大丈夫ですよ。早く分け前をくださいよ！」

ファラシオン「馬が帰ってこなきゃ駄目なんだよ、連れ帰してこい。ジョンドレド泣いてるじゃないか。」

ジョンドレド「もう（馬を探しに行ったので）いないよ」

ロールをしたが見つからない。道に迷う危険性もあったが

盗賊「早くお金をくださいよ！」

ボンブリオン「じゃあお前仲間になれ(笑)」

マスター「それはマスターが苦勞するからやめて。」

ファラシオン「・・・村人には俺らが帰ってこなかったら大人しくお金を払えっていつてあるから。そのお金を受け取っていいよ³⁴。」

盗賊「よし、じゃあ早速行ってくる。」

マスター「盗賊はどっか行っちゃった。」

ファラシオン「一人で行ったら怒った村人に殺されるだろ(笑)」

³⁴ よく考えたら、村が30gpを持っていなかったからこうなったわけで。この策は失敗していたと言うより他にない。マスターも気がついてなかったが。

マスター「娘はどうするの？」

ファラシオン「大丈夫か、娘さん？私はシンダールエルフ！」

村娘「ああ、エルフなんて初めて見るわ！³⁵」

ファラシオン「すごいんだぞ、ん？エルフの物真似～とかいって(笑)」

村娘「助けていただいて、ありがとうございます」

ファラシオン「娘の名前は？」

マスター「考えていない、適当につけて。」

ジョンドレド「名前はオークだ！」

ファラシオン「いいのか？お前の嫁さんだぞ。」

マスター「・・・(ちょっと考えて)『名前はシルフィです。』」

一同トラウマがあり³⁶、ちょっと引く。なので名前シルウィンにしておく。

などとしている間にジョンドレドは愛馬をさがすが、見つからない。

ファラシオン「娘さんはどういう状況で攫われたの？」

シルウィン「いきなり盗賊達が現れて・・・」

ファラシオン「あいつらは何か変わったことを言っていなかったか？」

シルウィン「いや、身代金のことばかり・・・」

ボンブリオン「狼と一緒にいたエルフを知らない？アウアウ³⁷」

シルウィン「村の人たちが見たらしいけど」

フドーリン「それはもう聞いたよ。」

ファラシオン「じゃあ、少し時間を置いて、娘を連れて村に戻ろう。」

マスター「そうすると、村の人は大喜びだよ。」

ボンブリオン「ここに盗賊が一人来ませんでしたか？」

マスター「『そんなの袋叩きにしてやりましたよ』(笑)」

ボンブリオン「任務完了！」

紆余曲折はあったが、結果的に村を救ったことになる

ファラシオン「では、報酬の方を。³⁸報酬だよ報酬！」

マスター「『では、少ないですが』とって 5gp をもらった」

ファラシオン「少ねえなあ～(笑)」

ボンブリオン「師匠、腹黒いです。」

マスター「お前らが持ちすぎなんだよ。」

また、フドーリンとボンブリオンは村の薬氏に治療をしてもらった。

その後、馬を村から借り、先に進むことになる。

ファラシオン「じゃあ、これで一気に距離を詰めよう。」

ボンブリオン「師匠、一人足りなくないですか？」

愛馬は戻ってきたが、ジョンドレドは搜索中。

ファラシオン「ジョンドレド～！(笑)どこいったんだよ」

³⁵ そのエルフの仲間がこの娘の目前で血の海を築いていたんだけど、これも気がついていなかった。

³⁶ シルフィアーナという、しょうもないキャラクターが過去にいたのだ。

³⁷ 舌が切れていることの表現らしい。

³⁸ そういや、助けに行く前に報酬の事なんて何も話していなかったが・・・

ジョンドレドの搜索を一行で行い、無事ファラシオンが見つかる。

ジョンドレド「馬がないんだよ～」

ファラシオン「もう帰ってきてるよ！頭いいから。むしろお前がバカなんだ(笑)」

ジョンドレド「いや、面目ない」

第6章 アリルの死と黒い剣の召喚

マスター「で、馬で追いかけることになった。追跡でロールをしてください」

追跡ロールの結果は大した事にはならなかった

マスター「肉薄はできないが、もう一日かかりそう」

ファラシオン「大分近づいているな、足跡がはっきりしている。ん！？このブローチは！？(笑)³⁹」

マスター「はいそこ！勝手にブローチを落とさない！」

そして、少しずつ距離を詰めながら3日目・・・

マスター「知覚ロールを行ってください」

ボンブリオンとフドーリンが100超えで気がつく

マスター「20メートルくらいの距離から一匹の狼が我々の所に進んでくる。そして更に50メートル先にはエルフがいる」

ボンブリオン「師匠！見つけました！」

ファラシオン「ん？私には見えないが(笑)ああ、あれかあれか。」

ボンブリオン「師匠、本当に見えているんですか？」

ジョンドレド「お湯を沸かすの？(笑)」

ファラシオン「狼は襲い掛かってきそう」

マスター「うむ。襲い掛かってきそう、エルフの方はもう少し様子を見ている感じ」

フドーリン「じゃあ、馬を降りて近づくよ」

ファラシオン「いや、バラバラになっても。皆で待ってもいいじゃん」

ジョンドレド「俺、誰か止めないと突進しちゃうよ」

ファラシオン「わーーーー(笑)、待て待て待て」

ロールを行ってとめられるかどうか試す。宣言したジョンドレドが悪い。

ジョンドレド「わー、止まった止まった」

ファラシオン「ここで止まって待ち構えるんだ。兵力の分散は武の、もとい愚の骨頂だぞ(笑)」

マスター「狼は、君たちがすぐにはかかってこないのを感じて、威嚇している」

ボンブリオン「グルウ～～～」

ジョンドレド「ピョンピョーン！(笑)」

ファラシオン「そりゃ狼もびっくりしただろ！ビクウって」

マスター「エルフはゆっくりこちらに歩いてきているよ」

ファラシオン「何エルフ？」

マスター「シルヴァンエルフ」

ファラシオン「俺より格下だな。と心の中で思っている」

ジョンドレド「お湯は沸かさなくていいのか？(笑)」

ファラシオン「うん。もうちょっと待ってて」

³⁹ LOTR 第2部より、オークに攫われたメリーとピピンがガラドリエルにもらったブローチを落とし、アラゴルン達に遺跡してもらったという話。

エルフ「お前たちは何者だ？」
ファラシオン「私はファラシオン！」
ジョンドレド「この馬はリシュリュード！」
ボンブリオン「みんな同時に喋っている(笑)」
エルフ「すまないが、見逃してくれないかねえ～」
ファラシオン「こっちの目的はすべてお見通しというわけか、だがこっちも依頼を受けているのでな。」
エルフ「そこを曲げて頼んでいるんだがねえ。」
ファラシオン「理由も聞かずにそうすることはできない」
エルフ「理由は言えないんだよ。大事な事なんぞね。あんたらを信用できるというわけでもない。」
ボンブリオン「そりゃ信用できないよなあ！(笑)」
ファラシオン「皆頷いているから(笑)。あんたはア Ril だな。」
ア Ril 「ほう、よく知っていなさるねえ。」
ファラシオン「アマーギンから聞いた。私はアマーギンの一番弟子だ。」
ア Ril 「あいつの弟子にしては意外と、まともっぽいな。」
ボンブリオン「それはないな！言ってみただけだ！(笑)」
ファラシオン「あんたがアマーギンの何を知っていると言うのだ！？」
ア Ril 「あいつの事を何も知らないんだねえ」
ファラシオン「何だと！？師匠の事を愚弄するか！アマーギン殿は立派な魔術師ではないか。」
ア Ril 「・・・しょうがない。本当は黙っているつもりだったが、言ってやろう。あいつはサウロンに心を売り渡しているんだよ」
ファラシオン「なにい—————！？サ、サ、サ・・・」
ア Ril 「知らないのかい？サウロンは既に中つ国をその手に収めようと既に画策していることを。」
ジョンドレド「サウロンって誰？」
ア Ril 「言っても信じてもらえないだろうけど」
ファラシオン「そんなこと、俄かに信じられるか！」
ア Ril 「まあ、同じエルフの誼で見逃してもらえないかねえ。」
ファラシオン「お前はシルヴァンエルフだ。私はシンダールエルフだ！俄かに師匠がサウロンと通じているといわれても信じられるか？証拠はあるのか？」
ア Ril 「それもそうだねえ・・・とはいえず、今は証拠もないしねえ。じゃあ、こう言えればいいかね。実は、この仕事はガラドリエル様の命令なんだよ。このパイプは————」
マスター「と、そこまで言ったところでファラシオンの後ろから光線が放た、するとア Ril はいきなり胸を押さえて苦しみだした。見ると、バラールの閉じていた目が開いていた」
ファラシオン「ああっ！」
フドーリン「バラール、お前目が見えるのか！？」
ファラシオン「そういう問題じゃねえよ！フドーリン！(笑)」
バラール「これ以上、この男と喋る必要はない。我々の任務はこのパイプを取り戻すことだ。」
ファラシオン「バラール！貴様まさか！」
バラール「これがアマーギン様の命令じゃないかね？」
ファラシオン「それもそうだ(笑)。そう言われれば」
フドーリン「しかし、殺すことはないだろ！⁴⁰」
ジョンドレド「俺の親父は戦うときは正々堂々と戦うって言ってたぞ！」
バラール「盗人に正々堂々もあるまい」
ジョンドレド「・・・うん。ごもっとも(笑)」
マスター「バラールはア Ril の体からパイプを探っているよ。狼は唸りながら、隙を伺っている状況。じゃあ、パイプを見つけていいね。」
ファラシオン「止めろ—————！」

⁴⁰ ここらへん、ボンブリオンが台詞を取られまくっているけど、面倒なのでカット。

ジョンドレド「死んだ人の体を探るのは盗賊と一緒にだ！」
フドーリン「それもそうだ」
ジョンドレド「まあ、今までやってたけどね(笑)」
ファラシオン「ボンブリオン！止めろー！パイプ取らせるなっ！」
ボンブリオン「へ？パイプ！？(笑)」

止めるためにボンブリオン以下、行動する。ジョンドレドがアリルの体とバラールの体の間に割って入る

バラール「邪魔をするのか？」
ジョンドレド「物事には順序というものがあるさー」
バラール「では、お前は何をしたいのだ？」
ジョンドレド「何をすればいいんだ？(笑)まあ、俺がよくわからない時は馬に任せるんだ(笑)」
ボンブリオン「馬が主人だから(笑)」
バラール「魔術師の弟子の割には感情に振り回されすぎだな。」
ファラシオン「まあ、バラール殿、あなたのなさりよう、突然過ぎて納得することはできん」
バラール「・・・」
ファラシオン「今まで戦闘に一切参加せず、危なくなるまで戦わず、突然この時に攻撃するというのが腑に落ちないのだよ(笑)」
バラール「盗賊を倒したのは私だがな。」
ファラシオン「いや、盗賊を倒したのは私の光弾だ！それは譲れないな！(笑)」
フドーリン「それで議論してもしょうがないって(笑)」
バラール「多少強引である事は否定しない。だが、アマーギン様の命令は絶対だ。お前にわざわざ言うまでもあるまい。」
ファラシオン「あくまで信用しろと言うのだな。」
バラール「その通りだ。」
ファラシオン「であれば、そのパイプは私が預かるう。」
バラール「そうきたか」
ファラシオン「このエルフを殺すこともならん。連れて行く！」
バラール「このエルフはもうすぐ死ぬ」
ファラシオン「手当てしてもいいだろうな？」
バラール「無駄だがな」
フドーリン「手遅れなの？わかる？」

各自ロールをしてとんちんかんな結果ばかり

マスター「もう少し描写をすると、外傷はないんですよ。ただ苦しんでいるだけ。君たちはなんとなく駄目そうと思った。」
ファラシオン「エルフを助け起こすよ。」
マスター「すると、アリルは。ファラシオンの手をつかみ」
アリル「お、俺はもう駄目だ！パイプは只のパイプではないのだ、後を頼む・・・死んだ(ガクッ)」
ファラシオン「ああああああっ〜〜〜！」
マスター「ところが、アリルが死ぬと、パイプからもくもくと煙が出てきた。バラールも驚いている」
ファラシオン「もしかして！」
マスター「その煙はだんだん一箇所に集まってきて、細長い形を為している・・・その後、パイプが砕け散る」
ファラシオン「おわあ！」
マスター「煙が実体化して地面に落ちる、真っ黒い剣だ。」

第7章 裏切り

ファラシオン「こ、これは一体!？」

マスター「バラールは無言で見守っている」

ファラシオン「俺も無言で見守っている」

マスター「誰か何とかしろよ(笑)」

フドーリン「無言で手にとって見ようかな?俺の体が消える？」

ジョンドレド「じゃあ無言で奪い取る(笑)」

マスター「手にとってみると、すごくひんやりしている。ただ、持ったところで今のところ呪いと思われるような異変はまだ起きないようだ」

フドーリン「まだ?まだか。片手剣だっけ？」

マスター「いや、両手剣」

フドーリン「じゃあ、俺が持っておこう」

マスター「狼は主人の死体に取りすがって、失意のまま何もできなくなっている。バラールは異変に驚いているがー」

バラール「我々の任務は果たした。パイプは取り戻せなかったがアマーギン様に報告すればいいだけだ」

フドーリン「この剣が何かはお前はわからないのか？」

バラール「私は知らない。アマーギン様であれば知っているかも知れないけどな」

ボンブリオン「鑑定ロールだ!」

マスター「させるものか。⁴¹ちなみに、この黒い剣は刀身に文字が刻まれている。共通語ではなく、読めないけどな」

ジョンドレド「共通語でも読めないけどな(笑)」

ファラシオン「このままアマーギンの元へおめおめと帰っていいのだろうか・・・？」

フドーリン「それよりバラールの目だよ。気になってしょうがない。」

バラール「これは私がアマーギン様に与えていただいた力だ。この目を見た相手に呪いをかけ、見ての通り、殺す事ができる」

ファラシオン「城塞都市カーレ⁴²にそんな奴がいた。」

マスター「俺もそういわれるのが怖かったのだ。光線が出るわけではないから。」

バラール「アマーギン様のところへ戻ろう。少なくとも、この剣が何かを知るためにはそうするしかない」

ファラシオン「いやだなと思っている。アマーギンに取り上げられたらそれで終わりだなと思っているから。待てバラールよ、あのエルフの言ったことが気になる」

バラール「ならば、どうするのだ？」

ファラシオン「ロスロリエンに行く。ガラドリエルに聞いてみる」

マスター「ガラドリエル様と言え(笑)」

ファラシオン「ガラドリエル様に確かめねばならん。これはエルフとエルフの問題だ。」

バラール「そういうわけにもいかん。まずはアマーギン様に届けねば。」

ファラシオン「・・・対立しているよ(笑)人間であるお前の言うことよりも同胞の言う事を信じる」

バラール「それはアマーギン様の言う事を信じないということか？」

ファラシオン「そ、それは・・・(笑)葛藤・・・」

バラール「お前がエルフとは言え、お前の師匠はアマーギン様だ。」

ファラシオン「(マスター、どうして欲しい?(笑)どっちでもいいの?)」

マスター「(何とかするつもり⁴³)」

⁴¹ 今に始まったことではないが、ボンブリオンのプレイヤーは空気が読めなくて困る。

⁴² そういや、復刻の動きのある『ソーサリー』第2部の話。レッドアイというヒューマノイド型怪物。常に目を閉じているが開くとビームを打つ。X-MENのサイクロプスを思い出してくれてもいい。

⁴³ この一連の会話、言うまでもないがキャラクターではなくプレイヤー同士によるもの。

ファラシオン「・・・わかった。まずは師匠の元へ帰ろう。」
ジョンドレド「わかった(笑)。僕がそのエルフの所へ何か聞きに行くから、その間に届けば？」

ちなみに、アマーギンのいる所であるアイゼンガルドとロリエンは今いるところから全く反対方向

ファラシオン「(プレイヤーの知識と今やりたいことを総動員すると、ロリエンに行きたいけど、アマーギンの所の方が話が面白くなりそうなんだよな)」
ボンブリオン「ファラシオンの師匠とやらのところに行くべきだと思うけど」
ファラシオン「じゃあ、ロリエンに入れるのは俺だけだから、アリの狼を連れてロリエンに行こうかな。」
フドーリン「俺らは剣を持って戻るって事ね？」
ボンブリオン「それは、それで面白いかもね。俺らが罠にはまるのか」
ジョンドレド「じゃあ、ファラシオンを乗せて途中まで行こう。」

第8章 罠と救出、そしてガラドリエル

ロリエンに向かうファラシオン、ジョンドレド組とアマーギンの元へ戻るフドーリン、ボンブリオン組。まずはファラシオン組から

マスター「ロリエンに到着すると、いきなり(武装した)エルフの集団が現れたよ。『何者だ！？』」
ファラシオン「私はファラシオン、灰色港のファラシオンだ。」
ジョンドレド「ジョン・レノンだ(笑)」
ファラシオン「ロヒアリムのジョンドレドだ。ガラドリエル様に面会を賜りたい。」
エルフ「例え灰色港のエルフでも、ガラドリエル様にそう簡単に会わせるわけにはいかない。」
ファラシオン「アリの遺言を伝えに来た。」
エルフ「アリの？アリはどうした？何故ここにいない！？」
ジョンドレド「パ～イプがね～(笑)」
ファラシオン「アリは死んだよ。殺された」
エルフ「何！？・・・そうか。まずはもう少し事情を聞かせてもらおう。ガラドリエル様に会わせるのはその後だ。」
マスター「君はロスロリエンに部屋に通されたよ。今までの事情を話す？」
ファラシオン「話す。自分がアリを追いかけていた立場のところから。私は事の真相が知りたいのだ」
エルフ⁴⁴「よかろう。ガラドリエル様に相談してみよう」
ファラシオン「やった、水鏡が見れる(笑)」

さて、ガラドリエルに面会したファラシオンだが、マスターの技量では残念ながら英知に満ちたガラドリエル様をロールプレイできないので、話の内容は要約する。只ひとつわかったことは、アマーギンの元へ戻った二人が危ないということである

マスター「エルフの駿馬を借り、アイゼンガルドに向かうことになった。」
ファラシオン「レンバスくれないの？レンバス。」
マスター「やるよ。持ってけよ！(笑)他にも欲しがるとはあるんじゃないのか？ブローチとか、マントとか。」

そして、舞台はアイゼンガルドに戻ったフドーリンとボンブリオンそしてバラールに移る。
ちなみに途上で、黒い剣を持つフドーリンが凍傷になりそうになったが。

マスター「アイゼンガルドに戻りました。アマーギンの館に到着する。バラールは剣をアマーギンに渡

⁴⁴ 実はロリエンのエルフ隊のリーダーですから、ハルディア。

し、アマーギンと面会する。」

アマーギン「そういうことだったのですか。まさか、そのような事になるなんて。いずれにしろ、気になるのは黒い剣ですね。調べてみなくては」

フドーリン「それより怪我治して」

アマーギン「わかりました。優秀な治療士を手配しましょう。今日のところはゆっくり休んでください。」

マスター「君は、アマーギンの館の一室に案内され、治療を受ける。気がついたら寝ていたらしい。ところが、起きたら牢屋。」

フドーリン「やっぱり。何だここは？」

ボンブリオン「いきなり？」

フドーリン「バラールは？」

マスター「いないよ」

フドーリン「バラールールっ！！」

マスター「反応ない」

ボンブリオン「うるさいなフドーリン。どうしたんだよ。」

マスター「ボンブリオン、君は起きると、地下の牢獄にいる。隣でフドーリンが騒いでいる」

フドーリン「周りを見てから物を言え(笑)」

ボンブリオン「何だ牢屋か。牢屋———っ！？一体どういうことだフドーリンこれは」

フドーリン「知るかそんなこと」

ファラシオン「その間こっちは、『二人が危ない』とか言って、馬で走っているよ。テテテ—テテテ—⁴⁵とか言って(笑)」

フドーリン「牢屋は破壊できそうにないの？」

マスター「武器も取り上げられているからね。」

フドーリン「状況がわからないからなあ。」

マスター「で、君らが意気消沈していると、牢屋の前にバラールが現れる」

ボンブリオン「バラール！」

フドーリン「バラール！」

ボンブリオン「俺の台詞遮るなよ。⁴⁶」

フドーリン「ここから出してくれ。」

バラール「出すことはできない。お前たちは秘密を知ってしまった。」

フドーリン「どういうことだ!？」

バラール「それも知らぬまま、ここで朽ち果てるがいい」

マスター「と行って去っていった」

ボンブリオン「おいちょっと待てバラール！」

マスター「バラールは返事することなく去っていった。ちなみに、バラールの持っていた他の松明に照らされた他の牢屋は、死体だらけ」

ボンブリオン「ぞ— — —っ！なんか臭いと思ったんだよな」

マスター「で、このまま二日間飲まず食わずで経過するんだけどいいよね(笑)」

ボンブリオン「だあれかあああ、たあすけてええええ！」

フドーリン「どうしようもないな・・・」

一方、ファラシオンとジョンドレドはアイゼンガルドに到着した

ファラシオン「アイゼンガルドが、今や禍々しく見える・・・このまま近づいていいのだろうか？」

ジョンドレド「どうだろう？行くしかないんじゃないのか？これ以外考え付かないから。こいつの頭じ

⁴⁵ 映画版の音楽を頭の中で流してくれればそれでいい。旅の途上で流れていた音楽。

⁴⁶ ホントはもっと喋っているんだけど、半分は書いてません。だって、この人ちゃんとロールプレイしていないんだもん

や(笑)」

しばらく、考えた後、ファラシオンは『透明』の呪文を自分自身にかける事を思いつく。

ファラシオン「じゃあ、スッポンポンになって、自分にかける。(そして潜入するよ)」

マスター「その間ジョンドレドはどうしている？」

ジョンドレド「馬の世話でもしているよ。」

ファラシオン「俺が何かあった時の命綱で。皆を助けた時のために馬を用意しておいてくれ。」

ファラシオンは自身に『透明』の呪文をかけ、潜入した。

ファラシオン「とりあえずアマーギンの館に向かうよ。」

マスター「(ご都合主義だが) ちょうど、アマーギンの部屋から出てきたバラールに遭遇した」

ファラシオン「はっ、隠れなくてもよかったんだ(笑)バラールの後を追けるよ」

マスター「バラールの後を追けると、君の知らない道を通り、地下の牢屋に向かうよ」

ファラシオン「こんな道が」

ボンブリオン「腹へったああああ、こんちきしよおおおお」

ファラシオン「あの声は・・・我が従者ながら情けない。」

フドーリン「うるせえ！ガシャーン！」

マスター「と、フドーリンとボンブリオンの前にバラールが現れたよ。もちろん、ファラシオンも透明でこの場にいる」

ボンブリオン「バラール！この場から出せえええ！」

バラール「まだ生きていたのか。」

フドーリン「ここから出たら真っ先に貴様を殺してやる。」

バラール「その前に私の邪眼が貴様を射抜くがな。まあ、使わずとも貴様らがここで飢え死にするのを待とう」

マスター「と言ってバラールは帰っていった。ファラシオンはどうする？」

ファラシオン「詰め所とかある？」

マスター「詰め所はないけど、壁に鍵の束がかかっているよ」

ファラシオン「じゃあ、その鍵を取って、牢を開けよう。」

ボンブリオン「おお、ついに幻を見るようになっちまったぜ。」

ファラシオン「ファラシオンだよ！お前の師匠だ。詳しくは後で話す。とりあえずここから出るぞ。」

ついでに、二人にも『透明』をかけ、ここから脱出した。と思っただが、強力すぎる⁴⁷のでファラシオンを斥候にして、脱出した事にする

マスター「君達は何とかアイゼンガルドから命からがら脱出することができた。フドーリンとボンブリオンは持ち物を全てなくしているよ。服だけ。」

ファラシオン「成功した、ジョンドレド。逃げるぞ！」

マスター「そして、時期を同じくして、アイゼンガルドの塔の上から大鷲が飛び立った。知らなくてもいいことだけど・・・」

ボンブリオン「で、どこに行くんだ？」

ファラシオン「一路、ロリエンへ！！」

というわけで、アマーギンの裏切りにより危機に陥った一行であったが、なんとか脱出し、黒い剣奪還のためロリエンに向かうことになった。果たして、この先どんな困難が4人の上に待ち受けているのか、誰も知らない・・・

⁴⁷ だって、指輪を持っているのと同じでかつ応用が利きすぎるということにこの状況になって気がついた。

次回予告

プレイヤーはガラドリエルの命を受け、黒い剣の奪還に向かう！
しかし、意気揚々と向かう一行の前に信じられない事態が！

そしてプレイヤーの前に立ち塞がる『邪眼のバラール』！奴の邪眼
を防ぐたった一つの秘策とは！？

黒い剣とは一体何なのか！？

フドーリンの覚醒とは！？

リシュリユー（ジョンドレドの馬）の運命は！？

ACRAP 提供 LOTRRPG

第2回『エメラルドの砦』！

乞うご期待！